

人 ④ ただ野球が好きなだけ、ですが

「子供のころから野球好き。今でもただの野球好き」と笑う白井弘さんを紹介したい。実は白井さん、本業はおすし屋さんだが、バットやボールを握る方も好きで、黒崎野球連盟の理事長なのだ。「ただの野球好きですよ」とくり返されるけれど、二十年以上も審判員をしり大会役員をしたり、白井さんがいるから野球ができる、なんていう声を聞いたりすると、ただの野球好きと書いていいのかわからなくなってしまふのだ。

そもそも、連盟だつて白井さんの尽力が大きい。昭和四十二年に出来たからもう二十年もかかわってききました。当時は新潟市で早起き大会が盛んになってきて、黒崎でもやろうと連盟を作ったのです。五十チームほど集まりました。わたしとしては、野球連盟は昔の青年会のような、各地域や職場の親睦を深めるものと思っていました」

子供のころは物がなく、グローブは厚い布、ボールは牛の毛をまわめて作ったという。戦後すぐで

したからねえ。大洋クラブという野球の草分けともいうべき大正時代にできた野球チームがあるので、そこにあこがれました」

「そのあこがれがいまでも野球へのあこがれとして残っているのかもしれない」

白井 弘さん
大野八区 五十二歳



5人の公式審判員を含めて60人の審判員がいることが、黒崎野球連盟の自慢と語る理事長の白井さん。自身も4月から10月までの野球シーズンは審判員としてグラウンドに立つ。壮年野球では現役選手で1番か2番「人を生かすバッティング」を心がけている。

「だれもが納得する位置で見ること、四人の審判員のチームワーク」と言う。「野球は個人プレーよりみんなの和が大切。これからの野球連盟の目標を「野球をとおした青少年の健全育成」に置いている。

とところで、白井さんのポジションだが「昔からチャンスを作る一番か二番で、守備はキャッチャーに決まっている」とのこと。野球好きで世話好きの白井さんらしい。(文・五十嵐広報担当)

訂正とおわび
8月号の「特集・平和」の記事中8ページの風間サキさんのインタビューで誤りがありましたので訂正しおわび致します。間違いは「子供が四人いた。十歳、十三歳、十六歳、一九歳」で、年齢が生まれた年の誤りでした。つまり、「昭和十年、十三年、十六年、十九年に生まれた子供が四人いた」に訂正します。



ほんの一冊

およめに欲しかった
(あすなろ書房)

本間 芳男

恋—甘くて、切なくて、うれしくて、哀しくて、憧れて、つらくて、はずんで、それから何があるのでしょうか。著者は「生きる支え」と強調しています。作品の中の少年の恋は、幼なじみのゆきぼうを大きくしたらお嫁さんに、というごく自然な感情であり、だれもが持つ淡い恋。しかし、戦争がありました。少年は特攻兵として散ってしまいました。髪の毛とつめも南の島の砂になろうとしています。赤い花の咲く南の砂の中で。大自然に感情がとけ合う描写の鮮やかさ、みずみずしさは胸にしみます。恋が当たり前のことだけに17歳の死は悲しいのです。「男の子を産んだかい、ゆきぼう。日本に今も、戦争はあるのかい」。静かな終わりです。人が生きることの大切さが伝わってきます。(紹介者：坂井ズズ子)



〈人の動き〉		前年	同月比
7月末現在 (前年比)	22,721 (+26)	[+444]	
人	11,182 (+25)	[+240]	
男	11,539 (+1)	[+204]	
女	5,971 (+37)	[+159]	
世帯	7月1日～末日	57	
出生	21	55	
婚姻	1		
死亡	10		



〔来月号の表紙〕
皆さんの情報をお待ちしています。特に、ボランティア活動や文化的活動をしている人マイホームの建て方を募集しています。広報のほかに町の記念誌を本年度は編集する予定ですので、皆さんの町のニュースをいまままで以上にお待ちしています。

交通安全の特集を久しぶりにした。本来は別の企画を立てていたのだが、「とにかく広報に載せてくれ」という悲鳴とも怒りとも脅しともいえる声が届いたからなのだ。広報で取材を進めると平穏な記事にならなかつた。記事がだんだん大きくなつていった。連続死亡事故が十日を超え、県の記録である十七日は遂に黒崎町でも発生してしまった。事故は国道8号で起きたもので、犠牲者は富山県の人である。加害者は千葉県の人でどちらもトラックのドライバー、追突が原因らしい。新潟日報の紙面では遂に一面トップである。新聞が交通事故を一面トップにもつてくるのは何年ぶりのことだろうか。それだけ、いま交通事故は大きな問題になっていく。来月号は今月号で予定していた「中の口川と信濃川の河川改修計画」を特集したい。取材と資料がたいへんなのではあるが...